



教職大学院 Newsletter

No. 36

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since 2008.4

2011.11.25

大学と学校・教育委員会のコラボレーション再考

—日本教師教育学会第21回福井大会シンポジウム—

大阪教育大学大学院（夜間大学院）大脇 康弘

教師の実践的指導力を育成しようとする取り組みが教育系大学院、特に教職大学院で重ねられている。そこでは理論と実践の融合、研究者教員と実務家教員の協働、大学と教育委員会の連携が基軸にされているが、スクールリーダーと新人教員の育成という二種類の人材育成と関わって、実際の企画運営と教育指導では創意工夫が強く求められている。

こうした中で福井大学大学院教職開発専攻（教職大学院）は、福井型「地域一学校拠点方式」というユニークな仕組みを構築し、教師の学習コミュニティを形成してきた。学校拠点におけるインターンシップ、講義、実践的協働研究、地域拠点における事例研究、そして大学院における毎月の合同カンファレンス、夏冬の集中講座とラウンドテーブル、長期実践報告の作成と発表会が全体をつなぎ深めていく。

特に現職教員は拠点校・連携校を代表して「大学院生」（派遣教員）となり、職場の学校づくり・授業づくりの実践を歴史的に再構成し、次なる課題と方略を見出して実践を展開するキーマンとなることが期待されている。新人教員は拠点校でインターンシップを行い先輩教員の指導を得ながら基盤的指導力を獲得していく。この徹底した学校現場主義・改革実践志向から生み出される「教師の学習コミュニティ」は、学校の内外に開かれたネットワークを形成しようとしている。福井型「地域一学校拠点方式」が魅力と共にすごみを感じさせる点である。

この度日本教師教育学会第21回福井大会に大会準備委員長の森透教授からお招きいただき、シンポジウムで「既設大学院（夜間）における大学・学校・教育委員会の連携・協働—スクールリーダー・フォーラム(SLF)を中心に—」を報告する機会を得た。夏のラウンドテーブルで本学の木原俊行教授が報告したのに続いてであり、大阪教育大学の取り組みの何をどんな視点から報告すべきか、スクールリーダー教育の実践者として直面し

解決すべき課題は何かを考えて、フォーラムの事例を中心に報告することにした。

スクールリーダー・フォーラムは、事例校の実践を素材に研究者・教職員・政策担当者が研究協議し学び合うことによって明日の実践の手がかりを得ると共に、その成果を教育研究や教育政策に反映させる仕組みである。フォーラムの形態は「公開協議型」「セミナー展開型」「参加者報告協議型」の三種類に分類できるが、福井大会では「参加者報告協議型」として取り組まれた第8回フォーラムを中心に報告した。この取り組みは4年間の総括に当たるもので、研究推進校21校の中から5校に参加してもらい、参加者は報告し研究協議して到達点を整理するものであった。第7回フォーラム報告書および『月刊高校教育』（学事出版）連載の内容をさらに理論的・実践的に深めることをめざしたが、学校づくりの実践と枠組を整理し次なる課題を明らかにできた。このフォーラムは学校関係者に支持されて10年にわたって持続的に展開されてきており、「大阪型フォーラム展開方式」と呼称することにした。

このフォーラムを支えている理念は、①スクールリーダーの「学びの場」を創る、②学校づくりを専門的立場から支援する、③学校づくりの理論・政策・実践を総合的に検討する、④実践者・政策担当者・研究者が現実に即して研究交流する、である。この理念は夜間大学院を支えている理念「教師の学習コミュニティ」(Professional Learning Community)と通底している。その理念

内容

- 大学と学校・教育委員会のコラボレーション再考(1)
特集1 世代のサイクルと相互性(2)
- 特集2 秋の公開研究集会(8)
連携校だより(12) 学会報告(17)
教師教育ネットワーク・交流のひろば(18)

を端的に言えば、「教育実践者と教育研究者が協同して教育現象と教育課題を考え立ち向かう時空間」であり、それを創り出す協同的・文化的営為といえる。夜間大学院では現職教員院生と大学教員がこの理念をバックボーンとして「学びの場」を創り出す営みとプロセスが重要である。その協同的学びを通して現職教員一人ひとりが教育を新たな目で見つめ、未来を切り開く鋭気を養うことになれば、夜間大学院のミッションが実現されることになる。

福井大会には夜間大学院スクールリーダー・コースで学んでいる校長・教頭6名と共に参加し、松木健一先生、森透先生、津田由起枝先生、

川上純朗先生、高間祐治先生、鈴木三千弥先生と交流する機会を得た。そして、福井市至民中学校の実践に触れて、教育関係者がコラボして創り上げている福井の教育を垣間見ることができた。福井大学の教員、院生の方々が元気にこやかに話されていたのが印象的であった。

今後、森透先生他2名が大阪で開かれる第11回スクールリーダー・フォーラムに参加され交流する予定である。こうした実践的交流の中で気づきと発見があり、知的化学反応が起きていくことを楽しみにしている。（大阪教育大学リポトリ参照）

特集 1 世代のサイクルと相互性

専門職としての成長を支え合うために：10月合同カンファレンス

10月の合同カンファレンスでは、「若い世代を支え、共に学び合う」をテーマに、それぞれの学校での経験と実践を語り合いました。ひとり一人の実践者の時を要する成長過程が、実践とコミュニケーションを通しての協働によって支えられていることを改めてとらえ返す会になりました。その時、語られたこと、聴き取られたことを報告します。

次の世代を支え、学び合うことの意味の共有化

—教育実習生と教職大学院のインターンを支えながら思うこと—

スクールリーダー養成コース1年／福井大学教育地域科学部附属小学校

浅野 尚美

本校が担っている3つの使命の中に、「教育実習校としての使命」がある。そのため、毎年、夏休み明けに、各クラス4～5名の教育実習生を受け入れている。

私は、本校に勤務して7年になるので、これまでに28名の教育実習生と出会っていることになる。毎年受け入れている教育実習生を見ていると、いろいろ思うことがある。

実習の初日に、私は、まず、教育実習生に「教員になりたいか。」と聞くことにしている。自学級に入る教生のほとんどが、「迷っている。実習を終えてから決める。」と答える。中には、「教員になるつもりはない。単位を取るためだけ。」と答える教育実習生もいる。「教員になりたい。」かどうかで、実習における態度や意欲が全然異なるのである。現場は、熱意をもった教員を欲している。教員になるかどうかを迷うのには、採用が難しいという実態もあるのだろうが、中途半端な気持ちで、子どもたちの前に立ってほしくない。

それに対して、教職大学院のインターンの学生たちの意欲はすばらしい。そして、現場で、中身

の濃い学びをしていると思う。福井大学のこのシステムは、実に有意義なものだと思う。

今年度の教育実習は、8月29日から9月22日まで実施された。私のクラス（2年2組）には、国語、数学、音楽、家庭科の4名の教育実習生が配属された。この4名ともが、最初から、「教員になりたい。」と意欲を燃やしていた。各自が、略案2本、細案1本の指導案を提出して、授業をすることになっている。毎日実施される国語と算数の授業は、4人で教材研究をして、1時間ずつ交代で授業を展開するようにしている。そのため、各自が8～13時間の授業を展開した。

若い教育実習生の実践を支えていると、私自身が忘れかけていたものを思い出させてくれる。私自身も、刺激を受け、多くのことを学ぶ貴重な経験になっている。改めて、今回、このように言葉にする機会を与えていただいたおかげで、新たに気付いたことがある。それは、子どもたちも、教育実習生も、若い院生も、異動してきて附属小の学校文化に新しく加わった先生方も、以下のような視点で、共通項が見えてきたということである。

＜教育実習生の協働した深い学び＞

放課後の授業反省会では、その日に実施された授業について、みんなで語り合う。連合体育大会の練習後の17時30分ぐらいからしか、その反省会は始められない。その反省会は、20時頃までかかることが多い。教員の勤務時間は、10時間勤務の19時までとなっているが、その時刻は守られたことがない。その後、各自が授業の相談や指導案提出をすると、終了はさらに遅くなる。時間的なことを考えると、教育実習生が各クラス1名だと、どんなに楽かと思うこともあったが、そうなる、学ぶことには限界があるように思う。

今年度は、自学級にインターンの法山さんが所属していることもあり、反省会は、私を含め、6名で実施した。教育実習生の授業においては、教師のデザインと子どもの学びの事実とのズレが大きく、それだけ教材の特質や授業実践の本質が根本から問われることになる。子どもたちは、思考が途中で切れてしまったり、緊張感のない状態が続いたりすることが多い。その原因を反省会で語り合うと、悪かった点はもちろん、良かった点も出てくる。仲間がやったことをまねしてみたり、別な方法を試してみたりと、お互いが影響し合い、多くのことをつかんでいく。しかし、仲間がしたようにやってみても、自分でうまくいくとは限らない。そこで、教育実習生は、自分を見つめ直し、自分のありよう（長所や短所を含めた人格）を自覚していくのである。さらに、授業の基本は何か、学びの成立は何によって達成できるのか、そして、学びの質を高めるために教師は何を学ぶ必要があるのかについて、深く学び合える機会となっている。

また、今年度は、法山インターンがいたため、より充実した反省会となっていた。教育実習生が語った後、まずは、法山インターンが語る。その内容が、実にすばらしい。目の付けどころがよい。自分なら、こうしたかもしれないと具体的な



方法を述べたり、ときには褒めたりして、的確な講評を述べるのである。さすが、教職大学院で深い学びをしているものだと感心する。法山インターンがいることは、教育実習生にも良い刺激を与えている。Y教育実習生は、法山インターンの授業記録を盗み見し、模倣し、自分なりに授業記録を書くようになっていった。そして、子どもの学びを中心に授業を見取るようになり、反省会では、法山インターンに次いで、深い意見を述べるようになっていったのである。実習が終わる頃になると、「今までは授業を何となく見ていたが、授業を見る視点がわかった。」とまで言い切るようになっていた。他学年の研究授業を参観した後は、「あの授業は、子ども中心の授業ではない。教師主導の授業だ。」と違和感さえも口にしていた。これは、毎日、中身の濃い授業反省会をしてきた成果だと考える。よく学んでくれたものだとうれしく思う。

次の文は、実習後、教育実習生が振り返りとしてまとめたものである。私自身も、彼らの成長を喜ぶと共に、久しぶりに、充実した実習だったと振り返ることができた。

学んだこと…教師という仕事のやりがいは、大きいということである。今まで“夢”としてとらえていた教師という職業を、近い将来の私の“仕事”として、見つめることが出来、改めてその魅力を感じる事が出来た。実習期間は、睡眠時間がほとんどなく、子どもがいる時間は身体を動かし、子どもが帰ってからは頭を使い、家に帰ってからも頭を使う…という、クラスの子どものために生きていたような毎日であった。しかし、不思議とその生活が辛くなかった。翌日、子どもを目の前にすると眠気が覚めだし、笑顔や納得した時の発言・びっくした顔を見ると、時間をかけて教材研究をしたこと、夜遅くまで教具を作ったことが一瞬で報われた気がしてうれしかった。やって良かったと、必ず思えた。頑張ったら、頑張った分の反応があり、私が意気込んでいけば、子どもたちも何か感じ取って意気込んでくれる。失敗しても、そこからは必ず学びと、毎日学校に来てくれる子どもたちがいて、よりよいものを作ろうと励むことが出来るのだと思った。これから、実習期間に得たことを活かし、自分を成長させたいと思う。(Y)

研究授業での授業づくりでは研究授業がある週は毎日12時近くまで小学校に残って指導案づくりや教材づくりをしていた。毎日が徹夜でとても苦しかった。でも、やるからには、今、自分出来ることをやりきりたいとの思いが強く、寝る時間を削ってでも授業づくりに取り組んだ。研究授業の前々日には模擬授業を行い、他の低学年の先生にも協力していただき、どのように改善していくとよいかのアドバイスをいただいた。模擬授業をすることでたくさんの発見ができたと感じた。前日には低学年の教生に教材づくりの手伝いをしてもらい、ワークシートの改善案などを一緒に考え、研究授業に向けての最後の準備に入った。…研究授業は45分という一瞬で過ぎてしまう時間だが、その授業のためにどれだけのことを考え、そして準備するのか、その大切さを学ぶことができた。そして何より仲間と協働することで授業はもっと良い授業になっていくことを知ることができた。他の教生では味わえない、とても貴重な経験ができたと感じた。研究授業をすることでたくさんの課題も見つかったが、研究授業をやり遂げたことを、今後の自信に繋げていきたいと思う。(T)

子どもたちにとって、教育実習生がいる1ヶ月はどのような意味があるのだろうか。夏休み明けに、本校の子どもたちが不登校になりにくいのは、教育実習のおかげではないかと考える。一人占めとまではいかないが、一緒に遊んでくれる教育実習生がいることは、子どもたちにとっては、うれしいことなのである。教師側からも、目が行き届くことになる。実習の終わりには、子どもたちが教育実習生に内緒で企画したお別れ会が開かれる。実行委員を中心に、話し合いが行われ、準備をし、実施される。お別れ会の最後には、別れを惜しんで涙を流す子もいる。実習が終わっても、子どもたちは、いろいろな教具を作って試行錯誤した教育実習生の授業をよく覚えているものだ。そ

れだけ、子どもたちにも大きな影響を与えているのである。

これまで、研究授業を参観する大学生を見ると、その場を動かさず、遠巻きに、しゃべりながら参観していることが多く、がっかりすることがあった。それは、もしかすると、どうやって授業を見てよいのかわからないからではないだろうか。今年度の附属中学校の研究集会でも、学生のやる気のない態度が気になった。教育実習をすることで、授業を見る視点が定まるのではないだろうか。そういう意味で、12月に実施される本校の研究集会では、教育実習を終えた3年生以上の学生が、積極的な態度で参観する姿を期待したい。

<謙虚な学びからすべてが始まる>

4名の教育実習生を見ていると、育てる側、つまり私の力量や識見、人格の高さが重要であることはもちろんであるが、それを受け止める側、つまり教育実習生の資質や人柄もまた、それ以上に重要であると感じる。つまり、「素直な者は伸びる。」ということである。

素直さとは、他者の言動を自らが受け容れるということである。自らが他者の言動を受け容れるということは、自分のある部分を変えるということにほかならない。人は多くの場合、自らを否定したり、破壊したりすることを好まない。現状を自ら否定し、破壊し、新たな価値ある情報や知見を探り入れるという行動が、伸びる、成長する、前進するということにつながると考える。

育てられる側に、伸びようとする思いがなければ、せっかくの指導も意味をなさない。本人が、その与えられた立場をどのように受け止め、その立場に立って何を学ぼうとしているかということにかかっていると考える。

このように考えてみると、その人に、「向上心」や「意欲」を高めさせることができるかどうかということになるだろう。そこには、「褒める」と

いうことが必要になってくる。人は、仲間から認められることで、自信をもつことができる。「自己存在感」や「自己効力感」を実感し、「伸びる喜び」を体感した者は、後でその思いに後押しされて自分自身で伸びていくに違いない。そうするためには、教える側、導く側もまた不断の謙虚な学びが必要になってくると考える。

なぜ学ぶのか。それは、「知りたい」「分きたい」と思うからである。「知りたい」「分きたい」となぜ思うのか、たとえば、それは現状の自分にはまだ「知らない」ことが多く、「分からない」ことが多いと自覚しているからである。この「謙虚さ」が、自分自身の経験に裏付けされた自信という壁を打ち砕くことになる。

教育実習生は、自分自身が授業をするまでは、人の授業を見て、批判的なことを言うことが多い。ところが、実際に授業をし、うまくいかないことで、初めて、謙虚になる。謙虚になれない教育実習生は、いつまでも、教師主導の授業から抜け出せないでいる。自分を変え、高めていくためには謙虚さが必要である。

<自分自身を磨く喜びを知る>

本校に勤務するようになって初めて教育実習生を指導する立場になった1年目の私は、自信がなかった。しかし、毎日、教育実習生と語り合い、実習録にコメントを書き込んでいると、次第に、自分自身の成長をも感じるようになってきた。つまり、そこには、自分自身の教育観を問い直し、言葉にしている自分があるのである。データとして自分の手元には残っていないので比較することはできないが、これまでの7回の教育実習中に、教育実習生の実習録に書いたコメントを分析してみると、私自身の変容が見られるのではないかと考える。そこには、私自身の教育観の変容だ

けでなく、人生観の変遷までもが映し出されているかもしれないとすら考える。

若い教師の実践の欠点の修正を求めることは簡単だが、その若い教師の成長する芽を見つけ、それを育むことは、通常以上の卓越した授業の観察と省察の能力を必要としている。これらの自覚をもって、私たちは、若い教師の成長を支援する必要があるだろう。

つまり、自分自身の人生観を磨き、高めることを忘れてはいけないと考えるようになった。他者をより良く改善していくためには、まずは自分自身のありようを磨き、高めていかなければなら

い。自らが磨かれ、高まったその時にこそ、力量のある教師となれるのではないだろうか。そういう教師の立ち居振る舞い、動作、日常そのものが

子どもに影響を与えている。これが教育という営みの本来の姿ではないかと考える。

テーマ：「若い世代を支え、共に学び合う」②

教職大学院合同カンファレンス スピーチ発表内容

スクールリーダー養成コース2年／福井市灯明寺中学校
竹林 史恵

現在、学年主任を2年半、研究主任を半年間勤める中で、20代、30代の先生たちとの関わりにこだわりをもっています。それには理由があります。それは、私が彼らとどう関わるか、それがすなわち彼らが生徒たちとどう関わっていくか、につながりがあることに気付いたからです。そう思うようになったきっかけを今からお話します。

私は本校に来て1年、2年と担任をし、次は3年担任だと構想を描いていた3月30日に突然、明日から3年主任をやるようにと言われました。非常に驚き、何をしたいのかもわからず不安でした。しかし幸いなことに、5人の担任たちは皆個性的で、自分というものをしっかり持っており、エネルギーで前向きでした。加えて、1、2年のときにやんちゃだった生徒達も2年後半から徐々によくなり、最上級生としてがんばろうという気持ちだったため、まずまずの滑り出しでした。

学年主任としては、当然喜ばしいことなのですが、正直言って私の心境は複雑でした。それは、1、2年の時に毎日苦しみながらも一緒に過ごし、成長を見つめてきた彼ら。その生徒達を、誰一人受け持つことができないのです。一体、私は生徒とどうかかわればよいのか？私の存在価値は、どこにあるのか？そういう気持ちで4月は悶々としていました。

そんな4月の終わり頃、一人の女の子が部活動で怪我をしたとあって、保健室に運ばれてきました。1、2年のときに担任をしていたこともあって、私はすぐに保健室に飛んで行き、「大丈夫？」と怪我の具合を確かめ、「お母さんに連絡しなくちゃね」と一人、慌てていました。そこへ知らせを聞いた担任がやってきました。その担任の表情を見た瞬間、私は「しまった！」と思いました。「私が一番にすべきことは、親に連絡することではなく、担任に知らせることだったんだ」ということに気が付いたのです。

その日を境に、私は学年主任の立ち位置について考えるようになりました。1ヶ月間、私が悶々としていたのは、自分が「6人目の担任」になろうとしていたからだ、ということに気づきました。でも生徒にとって担任は一人しかいません。



私は担任時代、よく生徒にこう言っていました。「先生しかできないことは、寝なくても、やるで。だからみんなができることは、自分達でがんばれ」と。同じように学年にとって、学年主任は一人しかいません。ということは、「『私の立場でしか見えないもの』『私の立場でしかできない事』がきっとあるのではないか」「6人目の担任、などと言ってないで、『自分の立場だからこそできること』を、スタッフみんなとつながりながら見つけていく。そして生徒に伝えていく。また、スタッフからいろんなことを聞きながら、主任としてスタッフや生徒に返していく。それが自分がこれからすることではないのか？」そう思ったときに、自分の道が少し開けたような気がし、そこから本当の意味で、学年主任として自分が歩みだしたと思います。

具体的には学年8～10名のスタッフと仕事をすることで、学年会を大事にしています。その中で行事や企画について協議するのですが、第1段階として主任が共有目標を掲げます。例えば修学旅行でいうと「命、時間、ルール」の3つを守る。これができたら成功。」などの大まかなものです。次の段階で担当者どごとくばらんに話し合います。本人の思いを聴いて、どんなことをしたいのか、どんな力を生徒につけさせたいのか、という点を膨らませて学年会にのせます。学年会では私はなるべく喋らないように気をつけています（実際はまだ多いのですが）。自分が喋らないとみん

なが見えます。みんなをじっと見ていると、積極的に自分の意見を言う人、みんなの意見を聞いてから自分の意見を言う人、スタッフ同士の様々な考え方の違い、スタッフ同士のつながり等が見えてきます。そんな中で主任はここぞというときだけ口を出すようにしています。それは、外部との交渉で障害が生じたとき、スタッフの意見が様々で方向性が見えにくくなったときです。そんな中で、みんなが自分の力を引き出しながら、よりよいものを創り上げていく、そんな風に学年が進むのを感じるようになりました。

昨年、1年主任をしていた時に、おもしろいことがありました。年度の後半に学年・学級でいろんな問題が起きました。それまで私が担当していた学年では、そういうときには教師が話をして終わる事が多かったのですが、昨年は学級会が開かれるクラスがいくつもあり、「なぜこのような問題が起きたのだろう」「どうしたら解決できるのか」について話し合い、考える時間がもたれました。生徒が自分達なりの解決方法を見つけ、それを担任がフォローする。それは我々スタッフの組織のあり方、決め方にとってもよく似ているということに気づきました。特に昨年は6名の担任の内、5名が20代、30代で、本校で初めて中学校の担任をするスタッフも多かったので、教師集団のあり方が学級経営に反映されていたのではないかと思います。

教科会についてもお話しします。本校勤務5年目になりますが、国語科は4名で、私はずっと最年長者です。20代、30代のメンバーが中心で、昨年からは講師もいます。そこで教科主任に働きかけて、教材研究にかける時間が多くもてるようにしています。その時に特に意識していることは、まず若い先生たちに「この教材どうやって授業してる？」と質問することです。すると彼女たちは、授業の進め方や生徒のことで、悩んだり困ったりしていることを話してくれます。かつての自分なら「だったら、ここはこうの方がよいのでは？」などと押しつけていたと思うのですが、最近では「今日の授業で、一番良かった点はどこだと思う？」「もう一度この授業をするなら、どこを変えてみる？」等、オープン・エンドの質問をしています。そうすることで彼女たちは考えて発言します。他の若い先生たちにも同じように質問し、「自分ならこうする」という話がざっくばらんにできる雰囲気になっています。

これについてもおもしろいことがあり、秋頃になって「先生、私この仕事やっていいですか」「他に仕事はありませんか」等、国語科以外の仕事も進んでやってくれるようになりました。これもよく考えると、自分の授業に責任をもって自主的に考えながら仕事をするようになり、少し慣れて周りを見ると「学校は授業だけではない。他にもいろいろな仕事がある。それにも関わらないと。」と気づき、授業以外の面でも自主性が生ま

れたように思います。

このように私が若い世代から得たことはたくさんあります。整理すると、次の3点です。

①自分が担任の時にはすべて自分でやらないと気が済まなかったのですが、今は若い世代だけではなく、スタッフ全員が共通の価値観や共有目標をもって生徒に向き合うことで、生徒への浸透度がとても速いし、強い。チームワークが強まると生徒への影響が大きい、ということです。これは私自身の収穫であり、大きな気づきでした。

②若い世代は生徒と年齢が近いので、心を開放しやすい。だからいろんな情報や心の悩み、恋愛についてなど何でも話してくれる。ベテランの教師だと警戒もあるが、若い先生たちには包み隠さず、特に本校生は何でも話すので、多くの情報を得ました。それがどれだけ、生徒指導やその後の企画に役立ったか知れません。

③若い教師集団が活性化することで、学校全体も活性化する。1学期の指導主事訪問の全体研究会で、フリートークの時間がありました。司会をしていた私は、みんなが発言してくれるか不安でしたが、一番始めに30代の教諭が挙手し、その時の話題であった色別活動についての現状や自分の思いを積極的に発言してくれました。それを皮切りに次々と手が挙がり、自分の立場から、現状、他の先生の良さ、今後のことについて語ってくれたのは、ほとんどが20代、30代のメンバーでした。研究会後の感想で、ベテランの先生たちから「若い人たちが積極的に発言してくれたことで、自分も考えるよい機会になった」「教師全体が一体となった感じがして、すごくよかった」という意見が出ていました。もちろん、それまでの日々の積み重ねがあったから、あのような積極的な話し合いをもつことができたのだと思いますが、「みんながひとつになってよかったな」という思いを教師集団が体感できたことは、今後、灯明寺中学校が進んでいく上で大きな財産になったのではないかと嬉しく思いました。

最後に、今後自分が若い世代と関わる中で、大切だと思う点を2つ述べて締めくくりたいと思います。

①彼らの背中をちょっと押すこと。彼らは経験が少ない分、不安を持っています。その時に「いっぺんやってみよさ」「大丈夫や」という言葉をかけることは、こちらが思う以上に心強いようです。そして、温かく見守ること。

②もし、うまくいなくても自分が責任をもつ。リーダーは、何が大切なのかを見極め、絶対に逃げない。

この2つをこれからも心掛け、彼らを含めたいろんな世代と共に、よりよいチーム創りをしていきたいと思っています。ご静聴ありがとうございました。

スクールリーダー養成コース1年／福井県教育研究所 金森 誠

本日程（22日）が所用で参加できなかったため、予備日程（29日）のカンファレンスに参加させていただいた。当日は、ストレートM1・M2・リーダーM1・M2のそれぞれが2名ずつ計8名の参加で、バランスのよい2グループが構成できるピッタリの人数での開催であった。

まず最初のオリエンテーションで、「新しい世代を支え学び合うことの意味」と題して、スクールリーダー養成コース2年の中学校勤務の先生のお話を聞くことができた。先生自身は、すでに本日程でカンファを終了されていたが、予備日程のオリエンテーションのために御参加していただいたようである。お話の内容は、現在勤務する学校での学年主任・研究主任を務めていたときの苦悩からの学びや、学年会や教科会を通して若い教師集団が活性化するために意識していることなどについてである。

先生の熱い語りを通して、新しい世代を支え学び合うため、多様な教育課題に対応するためには、教員個人の力量に頼らず、チームとして問題を解決する力が必要であることや、ミドルリーダー（中堅教員）にはコーディネーターとしての力量が必要であることをあらためて学んだ。

この後セッションが始まり、「若い世代をどのように支えるか」という視点で、ストレートのM1やM2、ミドルリーダー（中堅教員）としてご活躍のM2の先生とともに語り合う時間となった。この日、今回のテーマを知った直後は、若いストレートの院生の方々にとって気の重いセッションになるのではないかということに危惧した。このテーマで経験を語るのは厳しく、リーダーコースの院生の発言を聞くだけの場に終わってしまうのでは・・・と。しかし、蓋を開けてみると、リーダーの院生は自身の経験に基づく若手教員との関わり方を、ストレートの院生はインターンとして教育実習生を迎えたときの対応や他の院生との接し方をと、参加者全員がそれぞれの立場からの経験や思いを自由に遠慮せず語り合うことができる時間を持てた。

このセッションを通じて、今回も様々な実践経験を伝え合う・聴き合うことで、互いの共有の経験にでき財産にできたように感じられた。また、自由に語り合える雰囲気を作りながらも、脱線しそうな話の流れをごく自然に修正していくファシリテーターの重要性を再認識する時間ともなった。

教職専門性開発コース1年／福井県立鯖江高等学校 辻本 友舞

夏の集中講座が終わり、約2ヶ月。私は、スクールリーダーの先生方と語り合えるこの日を楽しみにしていた。普段は、ストレートマスターの仲間や教職大学院の先生方と語り合うが、スクールリーダーの先生方と語り合えるのは、集中講座と合同カンファレンスしかない。新たな学びを得たいという思いで参加した。

最初のオリエンテーションでは、附属小学校の浅野先生と、灯明寺中学校の竹林先生が、「新しい世代を支え学び合うことの意味」について、熱く語られた。教員として、人として大切なことは何か？それは、「素直さと謙虚さ」である。当たり前のことなのだが、私自身も出来ていないときがある。初心の気持ちを忘れず、日々精進していこうと再確認ができた。そして、若い世代によって、学校全体や子ども達にとってメリットとなっている3つの点について話を聞くことができた。

- ①仕事を自分一人で行うのではなく、皆にふる（チームワーク）ことで、生徒への浸透性が高い。
- ②生徒が心を開放する。年齢が近いことにより、情報がたくさん入手できる。
- ③学校全体が活性化する。

私はこれら3つのメリットがあることを聞いて、素直に嬉しく感じた。役に立っているのだろうかという思いが一気に吹き飛んだのである。保守的ではなく、失敗を恐れずにどんなことにも挑戦し続けたい。

次のクロスセッションでは、長期実践報告・1年目のまとめの構想に向けて、考えていることや悩みなどを語り合った。私は、「生涯スポーツにつながるような授業作り」を、授業実践の中で大切にしているが、楽しい授業＝レクリエーション的な雰囲気になってしまったり、生徒がふざけはじめたりしてどのような指導をすればいいのかで悩んでいるということを知っていた。すると、「年配の先生方と同じようにしなくてもよい。悩みを共有して、それぞれの立場で解決していく。若い人ならではの特権を生かすことが大切」と助言をいただけた。私は、周りの先生方のように、常に厳しく、子ども達になめられてはいけなく、もっとしっかりしなければと、上を目指しすぎ、自分の指導法を見失っていたことに気付くことができた。指導の一貫性を守り、揺るぎのない信念をもって、子ども達と関わっていききたい。中学校に勤める2人の先生方の話の中で共通していたことがある。「大人の社会で通用する人間を育てる。人と人との付き合いを大切にし、子どもの自主性・自立心を育てる」ということであつた。目先のことだけを考えるのではなく、将来のことを考えて指導する、まさにキャリア教育だと思った。

1学期の私は、授業をすることで頭がいっぱいになってしまい、子どもの学びはどうであったかを省察することが出来ていなかった。体育の授業を通して、何を教え、どのような人間に育てたいかを考えながら、授業ができるよう心がけていきたい。

特集 2 秋の公開研究集会

秋にはいくつかの拠点校で、公開研究集会がひらかれます。日々の実践と研究の積み重ねを表現し共有する大切な場です。本号では至民中学校・附属幼稚園の集会をお伝えします。

福井市至民中学校公開研究会報告

第4回公開研究会を終えて 「学びと生活の融合」～生涯学習のスタートへを切る～

福井市至民中学校研究主任
高間 祐治

去る10月28日、第4回至民中学校公開研究会が秋晴れの中、盛大に開催された。北は福島県、南は鹿児島県から県内外の教育関係者が来校して下さり、300名を超える参観者を迎えて開催できたことに、参観された皆様、関係の皆様に対し深く感謝申し上げたい。

今年度の公開研究会で昨年度から深化した点は、5教科すべてを授業公開したこと。半日開催であったものから1日開催にしたこと。それにともなって弁当の販売も行った。全校生徒による生徒集会を公開したことの3点が挙げられる。これらは今年度、研究主題のサブテーマが“生涯学習へのスタートを切る”に変更されたことや至民中学校移転開校当時の理想であった“5つのクラスター”になったこと。修学旅行の実施時期を2年生3月に変更したことから充実した4、5月のCタイムの運営を行えたことによる成果を公開したかったためである。

まずは午前中に行った生徒集会である。午前中でありながら120名を超える参観者に恵まれ開催することができた。5つのクラスターの3年生の代表者がステージに上がり、各クラスターの“良い点・売り・問題点・夢”を各クラスター同士、比較しながら発表していった。しかし、発表会にはしなくなかったのも、いろいろな行事にどのように取り組んでいったか。その時どのような対策を練っていったのかエピソードを混ぜながら発表し、その内容に対して他のクラスターが意見したり、会場から感想をもらったりしながら進行していった。

この集会を企画したのは2つの理由がある。1つはいくら異学年型クラスター制を短時間で研究主任が語っても見えにくい。ならば、実際の生活を生徒自身が語った方が伝わるのではないかと考えたからである。しかし、参観者のためだけのものにしてはならないと考え、今後のクラスター運営に利がある集会にしたのである。もう1つは生徒のプレゼンテーションする力である。昨年度から学校祭でプレゼンする取組が始まり、修学旅行では東京大学で福井をアピールする取組をしてきている。イベントでありながら日常化した取組であったため、生徒の力がどれほど育っているか見極めることができているからである。しかしながら、討論を入れながらのプレゼンは初めてであったため当初は、担当する金鑄先生が総合司会をしなければ成立しないと考えていたが、実際は台本もないのに生徒自らの言葉で進行し、金鑄先生は全く声を発するこ



となく生徒集会を終えることができた。公開研究会自体が生徒を育てる場になっていったのである。

また、生徒集会には安居中学校の生徒会メンバー13名も参加して下さり、学校間交流の幕を開けることができた。大変感謝している。

生徒集会後の昼食時間は、昨年度から始まった生徒による運営の活躍の場である。午後から参加して下さる参観者の受付や弁当の受け渡し、書籍の販売にお茶をサービスしながら生の声を届ける接待係、それを写真におめる記録係、来賓には専属の接待係がおもてなしの心を表現していくのである。首にかけたスタッフ証がその自覚を促す。どの生徒も役を粹に感じ、一回り大きく成長する姿が見て伺えた。公開研究会はいつ頃からか、教員の学びの場から生徒にとっても学びの場となり、参観して下さる先生方を心から待ちわびながら準備するようになってきている。昨年度、運営に携わった生徒を中心にした3年生は、学校の生活の様子を模造紙にまとめたものを掲示した。思いが伝わるよう、互いに相談しながらまとめる様子は、学校を愛する気持ちとお迎えする参観者に対してのおもてなしの心がにじみ出たものであった。

午後からは5教科と美術の授業公開である。どの授業も協働で取り組む問題解決型学習を実践した。また、生涯学習の見地から教科のできることを考え、チャレンジした。美術の授業では家庭科の保育の単元と関連させ、絵本づくりにチャレンジし、地域の保育園との地域連携にも繋がる取組を行った。

研究会では、教科の壁を超えた取組から教科の可能性の広がりを感じるとともに、教科に対する固定観念への挑戦であると賞賛して下さる声も聞くことができた。

小グループで生徒の学びの筋を振り返りながら本時の授業の意義を問い直し、参観者を含めた全員の今後の授業実践に役立たせることができる、よき省察の時間となった。

全体研究会は大変内容が濃すぎてしまい、シンポジウムに十分な時間をとることが出来なかったことを反省している。オープニングでは学校祭の地域交流タイムの1つの講座で学んだスコープ三味線を講師の方とともに演奏した。地域連携の一端を公開したかったためである。

今年度も、校長の挨拶ではなく生徒代表の挨拶で幕を開け、研究経過報告をしていくのであるが、これも研究主任だけで行うのではなく、クラスターの代表者5名もステージに上がり、インタビューしながら進めるものである。この形も定着してきており、できる限り生徒の生の声を届けたいと思っている。

生徒集会を行っての感想、本日の授業に取り組んでの感想、研究経過報告を聞いて思うことを語ってもらったが、思った以上に生徒は思いを伝えたり、「学校が生徒に何をしてくれるかではなくて、生徒が学校に何ができるかが大切」と語る発言まで飛び出してきたことには驚くと同時に涙の出る思いであった。

シンポジウムでは、東京大学大学院教育学研究科教授の秋田喜代美先生と清川メッキ工業株式会社代表取締役社長の清川肇先生と福井市の中学校長を代表して藤島中学校長の加藤正弘先生をお迎えし、福井大学大学院教育学研究科教授の松木健一先生にコーディネーターをお願いして「生涯学習の視点から中学校教育を考える」をテーマにシンポジウムを開催した。教育界だけでなく、企業の視点からも社会に出てから必要な力を中学校教育でどう養っていったらよいかを考えたく、3人のコメンテーターを決めた。

秋田先生からは協働の在り方を生涯学習に活かすには、協働の必要性を問い直すことから始めるべきであるというアドバイスをいただいた。机を合わせれば協働といった具合に形にこだわりすぎると良い授業展開にはならないと示唆していただいた。



清川先生には至民中で培った力は至民中にある間はなかなか感じられるものではないが、高校、大学、社会人といった具合に成長していく中で、自分自身に備わった力に驚くときがあるであろうと至民中に期待するお言葉をいただいた。

加藤先生からは、至民中のように新しい学力観に基づき、学校改革し続けることの大切さを力説され、藤島中学校でも学校改革に取り組んでいることを紹介された。その中で互いに連携し合い、大きな流れを福井市中で作り上げていく役割が至民中学校にはあると話され、私たち自身、あらためて襟を正すことができた。40分間と大変短い時間であったため、もっと話を聞きたい思いでしたが、内容濃く今後の学校の在り方を明らかにしていただいた。

このように公開研究会は、学校が大きく成長する1日である。繰り返しになるが、その姿を多くの参観者に見守られたことに大いに感謝したい。ありがとうございました。

公開研究会が終わった今、至民中学校はもうすでに前を向いて走り続けている。11月は校内での授業公開月間である。嬉しいことに先陣を切って授業公開しているのは、今年度から勤務している教員や若い教員が中心である。沸き上がる意欲、実践する意義、参観してもらえる喜び、高まり合う同僚性の中、ますます進化・深化・新化し続ける至民中学校に期待していただきたい。



福井大学教育地域科学部附属幼稚園研究集会

幼児の「協同」と教師の「協働」～幼児教育研究集会を通して～

福井大学教育地域科学部附属幼稚園
齋藤 弘子

幼児教育では、子どもたちが力を合わせてつながり合う姿を「協同」とし、教師が共に支え合って保育を行う姿を「協働」と表す。11月5日（土）に本園で行われた幼児教育研究集会は、「協同」と「協働」について、大勢の幼児教育関係者と共に、伝え合い語り合う機会となった。

本園では、研究主題「伝え合う ひびき合う」～協同して遊ぶ姿を求めて～のもと、幼児の「協同性の育ち」について研究を行っている。幼児の伝え合いひびき合う瞬間を見つめ、何を感じているのかをとらえ、教師が持つねらいや意図を絡めながら、「好きな遊び」と「みんなの時間」のサイクルを生み出していく取り組みであり、「振り返りながら、つなぐ」ことが核となる研究である。

附属幼稚園での保育には、「好きな遊び」と「みんなの時間」という時間がある。「好きな遊び」は、学年・学級を解いて、幼児が自発的・主体的に様々な環境にかかわって遊ぶ時間であり、「みんなの時間」は、学級や学年の幼児が集団で活動する時間である。「みんなの時間」では、「好きな遊び」を振り返りながら、気付きや感動、課題などの共有化を図る。幼児の気づきや思いを次の日につなげたり、幼児同士のかかわりを深めたりして、幼児の協同して遊ぶ姿を育てていく。幼児の主体性・教師の意図性・見通し・つながりなどのキーワードが絡み合い、幼児・教師・保護者間の様々な共有と、日常のスパイラルな積み重ねで育つ姿である。

参観者の先生方からは、「遊びを振り返る活動を自分の園でも取り入れたい」などの声が聞かれ、本園の取り組みに共感しながら、自分の保育を振り返る声を多く聞くことができた。福井県教

育委員会に今年度新たに「幼児教育支援室」が設置され、これまで以上に、附属幼稚園の役割として、多くの保育園・幼稚園と実践を共有することが求められていると感じた。

無藤隆先生は、総括助言の最後に「保育者が自らの保育をいかにして改善すべきか」を語られた。「一人一人の子どものエピソードから学びのストーリーを描き出す」「保育者が子どもにどういった働きかけをし、どう対話を可能にし、どういった教材や環境設定をするかを振り返る。そのための記録を作り、見直し合う」などの説明をされた後に、「まさに、この幼稚園ががんばってきたことである」という言葉をいただいた。

課題は尽きることがないが、教師全員で、日常的に幼児の姿を語りながら、力を合わせ続けることが最も大切だと確かめられた。今後も、あらゆる場面での「共有」を大切にしながら、実践・研究を続けていきたい。



遊びを通して子どもの社会が広がる幼稚園

教職専門性開発コース1年／福井大学教育地域科学部附属小学校インターンシップ

小島 俊祐

私は普段、附属小学校の1年生のクラスにインターンとして入っている。子どもの会話において、「その遊び、幼稚園でやったことがある！」という、これまでの生活体験を生き生きと語る姿から、幼稚園での取り組みに興味があり、今回参加することにした。

公開保育では“好きな遊び「もりもりランド」”，片付け、みんなの時間という一連のつながりのある活動に興味を持った。「もりもりランド」は10月中旬に年長児だけで行ったわくわく遠足で、森の中を散策しながら木登りをしたり、笹やヨモギを自分たちで摘んでお茶作りをしたりした「共通の感動体験」をもとに、「森の宝探し」「森のレストラン」「森の大工さん」などを子どもたち自身が考え出していて、好きな遊びとなって展開していた。好きな遊びは学年・学級を解いて、子どもが自発的・主体的に様々な環境にかかわって遊びが展開していくように工夫されていて、縦の協力が附属幼稚園の特色だと感じた。3歳児、4歳児、5歳児と発達段階に差がある子どもたちが同じ遊びの場で、他者の存在を意識し、なんとなく一緒にいることの心地よさを感じながら活動しているようだった。その中で黙々と一人の遊びに集中する子、協力して一緒に遊ぶ子、教え教えられる関係でつながる子、真似して同じことをしてみようとする子など、子どもたちの自然な姿が広がっていた。

私は特に5歳児に注目しながら「森の大工さん」の遊びの場を参観した。黙々と自分のやりたい仕事を見つけては、釘で屋根の板を金槌で打ち付けたり、曲がった釘を釘抜きで抜いたり、窓に青いビニールを取り付けたりする作業をしていく。木の家の完成ビジョンが、遊んでいる子どもたちに共有されていたり、事前に役割分担がされたりはしていないのだが、所々でかかわりながら分業、協力していく中で同じ目的に向かい、つな

がっていくのだと感じた。他者との会話より、自分のやりたい作業に没頭しているのだが、「この釘抜いていい?」「この釘抜いて」「それ貸して」「待って」と自分の想いを相手に伝える場面もあった。時には自分の思い通りにならず、その場を立ち去る子もいたり、友達から「隊長教えて」と言われ、得意気に金槌を受け取りやって見せたりする子もいる。また、教師が下の学年の子に教えてあげるよう働きかけると、自分のやっている作業の手を止め、見本を示したり、金槌よりも刺さりにくいが使いやすい木のハンマーを持ってきたりしながら優しく教える姿も見られた。片付けの時間になって、自由に遊んでいたやんちゃな5歳児の子たちが「あっ、みんな片付けしている！まずい！」と自分で気づいて焦って片付けに向かう姿も印象的だった。「みんなの時間」では子どもたちは、今日の気づきや課題を共有した。その中で教師は、「どうやったら下の学年が楽しく遊べるか」と問いかけたり、教師が見取った子どもの姿を話題に取り上げて紹介したりして、年長であるという自覚を子どもたちに与えるとともに、子どものいいところを認めてあげていた。この一連の活動の中で、子どもたちは、達成感や充実感を味わい、より自発的な遊びや行動を促進させているのだと感じた。

他学年とかかわりながら、自然と年齢に応じた役割が生まれ、5歳児は下の学年がどうやったら安心して楽しめるかを考え、教えたりする機会も増える。また、年長さんである自覚が生まれる。下の学年はよくわからないままであってもなんとなく同じことをして、お兄さんお姉さんに受け入れられて嬉しいと感じる。その経験は継承されて、下の学年にも伝わっていくのだろう。教師の支えと十分な時間の中で、子どもが夢中になって遊ぶことで生まれてくるつながりや学びがあると改めて知ることができた。



連携校 だより

越前市武生第二中学校

スクールリーダー養成コース2年
久島 晋

本校は、越前市の中心市街地にある武生西小・武生南小と、農村と新興住宅地の混在する神山小地区を校下とする、生徒数470名の中規模校です。

本校の特色として、保護者や地域との協働体制が構築されていることがあげられます。生徒の全保護者と地域住民による「下校時の見守り活動」や、地域の専業農家の方を講師としてPTAや地域のボランティアの方の協力を得て行われている古代米の「黒米の栽培」など、学校だけでは出来ない活動が数多く展開されています。

「黒米の栽培」は、今年で13年目になる本校独自の活動で、種蒔きから刈り入れまでの一連の活動を、1年の3学期から2年の2学期までの一年間かけて行っています。また、収穫された黒米は、うどんやおかき、おはぎに使用し、収穫祭で全生徒に、黒米とともに配布しています。特に、黒米うどんは学校祭時に地域の方にも振る舞われ、毎年、多数の方が来校されています。

生徒たちは、落ち着いた雰囲気の中で毎日の学校生活をおくっており、体験活動を通して身につけた力を日々の活動や学校行事で発揮しています。先日の学校祭の準備時に実施した「色別対抗草取り大会」では、3年生の生徒が中心となって雰囲気を盛り上げてくれ、グラウンドの草のほとんどが無くなるほどの成果をあげました。このことは、「教師が仕組む」→「生徒が努力し、成果をあげる」→「教師が賞賛する」→「生徒が満足感や達成感を味わう」→「次の活動に対する意欲をもつ(生徒だけでなく教師自身も)」といった「学びのサイクル」の一つの形が本校に出来つつあるということを実感できた瞬間でした。また、昨年度より、教師が学び合う機会をつくるために始めた生徒指導研修会や授業研究会の成果を感じることができた瞬間でもありました。

生徒指導研修会は、長期休業中に実施しており、昨年度は「教師の取り組みと生徒の実態についてふりかえる」、「次年度に向けての具体的な取り組みを決める」というテーマで、小グループによるディスカッションを行いました。話し合いを通して、生徒指導に対して他の教師も同じ不安を抱えていることがわかったり、お互いの生徒指導観を知り合うことが出来



たりし、同僚性を高めるよい機会になりました。また、次年度に向けての取り組みを考える際には、「まずは教師から」というキーワードが提案されるなど、教師の意識改革のきっかけにもなりました。本年度は、「生徒指導の三機能」を授業で意識することと、ベテラン教員がもつ生徒指導のノウハウを若手教員に伝えるための事例検討会の2本立てで実施しました。実践に裏打ちされた先輩教師からの話は、どれも説得力があり、若手教員にとってよき指針となったようです。

授業研究会は、生徒の変容を見取ることをテーマに、今年度は年間3回実施します。生徒を見取るためのテーマを設定し、全員で授業を参観後、小グループによる研究会を行っています。先生方からは、「自分の授業を見つめ直すよい機会になる。」、「学び合い、深め合いこそが授業であると再認識した。」といった声が聞かれ、授業に対する意識の変容が感じられます。

少しずつではありますが、生徒の変容が目に見える形となって現れてきたことで、生徒指導を中核にして実践してきた取り組みの有効性を実感しているところです。これからも、「生徒が変わるためには、まず教師が変わること」を念頭に置き、実践を深めていきたいと思ひます。



福井県立藤島高等学校

スクールリーダー養成コース2年
富澤 宏二

150年を超える歴史と伝統を誇る藤島高等学校は、福井市の中心部・文京地区に位置し、卒業生には平成20年にノーベル物理学賞を受賞した南部陽一郎博士をはじめ優れた人材を数多く輩出しています。本校は全日制の普通科高校で、ほとんどすべての生徒が大学等への進学を目指しています。教育課程においては、2年次から志望に応じて文科系と理科系のコースに分け、その中でいくつかの選択科目を設けて、生徒一人一人の能力・適性が十分に発揮できるように配慮しています。



ノーベル賞記念碑

本校は、平成16年度から5年間、スーパーサイエンスハイスクール研究指定(以下SSH)に取り組み、さらに平成21年度に新たな5年間の研究指定を受け、本年度はその3年目にあたります。

現在取り組んでいるSSHでは、その目的として、「問題発見能力・問題解決能力に富み、国際感覚と言語能力に優れ、未来につながる課題に意欲的に取り組む理数系人材と、広い科学的視野を有し、科学技術を正しく理解・評価する能力を備えた文科系人材の両方を総合的に育成すること」を掲げています。さらにそれとともに「探究のためのリテラシー全般の習得を目指した教育活動と、諸機関との連携による科学への興味・関心を高める講義・講演等を組み合わせ、将来の日本を担う高校生に必要な科学的基盤を育成する『全校的に取り組める持続可能な教育プログラム』を研究開発する」ことを目指しています。

その具体的な取組として、藤島高校独自の教科である学校設定教科「研究」を設定しています。1年生は「研究基礎」として週に3回、情報に関する内容と課題研究の取組(水曜7限)を行っています。1学期の課題研究系の授業では、各クラス毎に、身近な話題を用いてメディアリテラシーやプレゼンテーション等の方法について学びました。さらに、2学期にかけてこれまで学んだ技法を生かして、ディベートに取り組みました。生徒は「炭素税導入」と「積極的

安楽死」のテーマで、夏休みを使って準備を進め、9月14日、29日にはクラス対抗戦を行いました。秋以降の年度後半は、それぞれの興味のある分野に分かれて、小グループによる課題研究を進める予定です。

2年生は「研究基礎」で学んだことを活かし、自ら設定した課題について、主体的に研究をすすめていくことを目標に、「研究S, A, B」に取り組んでいます。この7月から9月には、春から取り組んだ研究の中間報告会を実施し、生徒どうし相互批評をするとともに、大学の先生や卒業生の大学院生などに聞いてもらい、アドバイスを受けることができました。生徒の研究成果は、12月(2年生)および2月(1年生)に課題研究発表会で報告する予定です。

また、日ごろの授業以外の取組として、講演会、大学講師招聘講座による高度な科学の学習やエクスカーションによる最先端の科学に触れる体験を通して、科学に対する興味・関心を高め、将来の科学技術者の育成を目指しています。現在、全校体制でSSH事業が進められており、学校全体に活性化をもたらしています。



「研究基礎」風景

福井県立羽水高等学校

スクールリーダー養成コース2年
島田 一博

こんにちは。3月に、無事卒業できることを願ってやまないM2の島田です。拠点校・連携校だよりということなので、紙面をお借りし、私の勤務する福井県立羽水高等学校の紹介をしたいと思います。羽水高校は、今年で創立48年、私と同じ年男(女?)の学校で、福井市の東に位置しています。学校の入り口がわかりにくいことが有名で、毎年異動で新しく学校へ来られたほとんどの先生方は、「校舎やグラウンドは見えるのに、校門にたどり着くまでかなり時間がかかった。」と言います。かく言う私もそうでした。本校にお越しの際は、板垣交番からまっすぐコースがよいかと思えます。各学年9クラス、全校生徒は約1,000人、教職員は約80人です。福井市内から通う生徒が多いですが、坂井市や鯖江市などからも通う生徒もいます。素直で明るい生徒が多く、元気な挨拶ができる生徒が多いのも自慢の一つです。ほとんどの生徒が大学等の上級学校に進学を希望しているので、本校も他の進学校と同様に、2年時から文系、理系のクラス分けを行っています。また、1年時から特設クラス、標準クラスと生徒の志望や適性等を考慮したクラス編成も行っています。特設クラスでは、1年時から羽水名物の朝補習(8時から30分間)を実施しています。なお、受験を考慮し、3年生は全9クラスで朝補習を実施しています。「羽水と言えば〇〇部」と言うように県民や福井市民の方に連想されるような部活動はないかもしれませんが、多くの生徒は、学業だけでなく時間をやりくりしながら部活動にも熱心に取り組んでいます。女子ソフトテニス部、男子ハンドボール部、吹奏楽部等は県下でも強豪と言えると思うし、私が顧問を務める陸上競技部もここ4年間で3人の生徒が延べ4種目でインターハイに出場しています。一昨年は、ボクシング部の生徒がインターハイで3位に入賞もしました。特徴的な学校行事としては、4月下旬に行われる「強歩大会」があります。バスで学校から移動し、移動地点から学校を目指し、男子は約30Km、女子は約25Kmをただひたすらに歩くだけの行事ですが、そのシンプルさがいいのです。3コース(糸生、今立、美山)があるので、生徒たちは3年間毎年違ったコースを歩くことができます。私は、羽水高校の学校行事では、この強歩大会が最も好きです。

さて、このような羽水高校ですが、今年度は、今までになかった取組みが行われました。7月の職員会議において、10分程度ですが、大学院での学びを報告してもらった時に、「お互いに教科を超えて授業を見せ合う互見授業をしてみませんか。」という意見を出しました。この意見と管理職が昨年に行っている授業参観、県の授業公開を



積極的に行うべしとの指導が絡み合い、教務部提案の形で、10月末から11月初めにかけて約2週間「公開授業週間」という期間が設定されたのです。まず、この期間にあわせて、種々の研究授業、公開授業が行われました。高教研理科部会生物分科会の公開授業は、2日間に亘って3名の先生が授業を公開しました。他校からも5、6名の先生が参観されていました。数学科の学力向上推進の公開授業には、福井大学の伊禮先生を含め他校から約30名もの先生が参観に来ていただきました。新採用研修、10経年の研究授業も指導主事の先生をお招きし、授業者と同教科の本校の先生中心に研究協議会を含め盛況に行われました。ただ私の教職大学院で学ぶ者としての研究授業は、昨年度は数学科の校内研究会を兼ねたので、本校の数学科の先生全員が参観してください、その後研究協議会も開いてくださったのですが、今年度は時間割調整がうまくいかず、参観者は大学院の指導教官3名だけというやや寂しい形でした。

さらにこの「公開授業週間」には、今までの、自由な参観がだめだったというわけではないのですが、「この期間は公開授業・研究授業と銘打っていないけれども、どの先生のどの時間の授業も自由に参観してもよい。」という柱がありました。私もたくさんの授業を参観したいと思っていましたが、なかなか時間がとれず、同部屋の先生の2年生の「現代文の授業」と普段数学の授業を担当している1年生のクラスの「オーラルコミュニケーションの授業」の2つしか参観できませんでした。何名かの先生方にお聞きしましたが、「授業の空き時間もいろいろ仕事があり、参観したくてもなかなかできなかった。」という意見が多かったです。しかし、この取組みは、まだ始まったばかりで、そ



の運営方法についてはまだまだ改良の余地はあると思います。1年で消滅させてはいけないと思います。教頭先生と教務部長の了承を得たので、今月の職員会議で、今回の「公開授業週間」に関するアンケートを採ること

にしました。そのアンケートの集計結果を来年度にぜひ役立てて欲しいと思います。

羽水高校もこのように少しずつですが頑張っています。今後ともご指導、ご助言お願いいたします。

高浜町立和田小学校

スクールリーダー養成コース2年
松見 浩司

本校は、高浜町の東部に位置する小学校です。少子化に伴い、児童数は年々減少傾向にあります。各学年1学級で特別支援学級を含めて7学級、児童数132名の小さな学校です。小さな学校ですが、学年ごとにかたまって遊ぶことが多く、たてのつながりをもっと持ってほしいという願いからたてわり班活動（異学年集団による活動）を行っています。毎月2回は、たてわり班ごとに色別遊びを行っています。高学年がリーダーとなって、集団遊びを考え、1年生から6年生までみんなが楽しく遊んでいます。このようなたてわり班活動を通して、たてのつながりが芽生え、異学年集団による伝え合い・学び合いが生まれています。

たてのつながりと同じく、横のつながりも生み出せるように、学級づくりにも一生懸命に取り組んでいます。本校の研究テーマは、「伝え合い、学び合う授業の創造」です。子どもたちは、元気にのびのびと生活をしている反面、自分の思いを周りに伝えたり、お互いの考えを出し合い、学び合ったりすることを苦手としています。そこで、まず、どの学年も「聴くこと」を大切に、しっかりと相手の方を向いて聴くことができるように指導しています。聴いてもらえるという安心感を学級全体に浸透させることで、自分の思いを周りに伝えようとするのではないかと考えています。また、学級づくりの取組の一つとして、学校全体で生活綴り方にも取り組んでいます。日記帳に子どもたちの生活を書いてくるように指導しています。そして、子どもたちが書いてきた作文に担任がコメントを書いて返します。また、子どもたちが書いてきた作文を学級全体にも



配布し、一人一人の思いを共有する時間をとっています。一人一人の思いを共有することで互いを理解し合い、横のつながりもできてきています。

教師同士のつながりにも、目を向けて取組を進めています。和田小学校は、教師の平均年齢も高く、ベテランの教師が多いため、事前研修会の回数も限られていました。しかし、教職大学院に通うようになって、グループごとに自分の思いを話したり、相手の考えを聞いたりすることの大切さを学び、考えが変わりました。今までのような全員参加の研修会というよりも、4~5人ぐらいの教師が集まり、より実践的なことを「伝え合い、学び合う」ことが必要ではないかと思うようになりました。今までも指導案を事前に検討する部会はありましたが、部会によって温度差があったり、年度によって部会を開催したりしなかったりといったものでした。そこで、今年度からは、低学年部会と高学年部会を組織し、研究授業の前に研究していく場を確保することにしました。部会を開催する時は、特別時間割にして時間を繰り上げることで、午後4時から1時間程度部会をする時間を生み出しています。そうすることで、先生方も集中して部会に参加することができています。今年度は、新しく「学び合い」の授業づくりを取り入れることになりました。そして、「学び合い」の授業においては、中心課題が最も大切なものとなりました。このことについての事前研究が今まで教師主体の授業より重要であることから、事前の教材研究、児童の動きを試す教師をモデルとしたプレ授業に力を入れることになりました。事前研究会の中では、教師同士の「伝え合い・学び合い」が生まれてきています。その他にも、今年度から、「伝え合い、学び合い」の授業イメージを



たてわり班活動（マラソン大会に向けての練習）

そろえるために、同一の研究図書を読み合ったり、学期ごとに各自の実践を振り返り、それをまとめ、実践報告会を行ったりしています。実践報告会に向けてレポートにまとめることで、自分自身ができたことやできなかったこと、なぜできなかったのかなどを省察することができています。

また、授業を参観する上で、心がけることについても共通理解を図りました。授業を参観する時は、「子どもを見取る」ことをお願いし、「いつ子

どもが学んだのか」「なぜそう言えるのか」など、子どもの学びを中心に授業を参観していくことにしました。子どもの学びを中心にすることが定着していくと、事後研究会において、子どもの変容や変わり目について語る教師が増えてきました。

今後、和田小学校では、子ども同士、教師同士がより一層「伝え合い、学び合える」関係を築いていけるように、現在の取組を進めていきたいと考えています。

鯖江市片上幼稚園

スクールリーダー養成コース2年
宮澤 啓子

本園は鯖江市東部・鯖江市と福井市とにまたがっている文殊山の裾野に位置し、田畑や川など自然に恵まれた環境にあり、全園児26名がのびのびと園生活を送っている。片上小学校との併設園であるため、日頃から幼小連携教育に取り組んできている。また、地域の中核施設である公民館とは隣接しており、様々な行事を小学校や地域と共に行い、地域コミュニティにも積極的に参加している。本年度の教育目標を「元気いっぱい かがやく子」と定め、目指す園児像を「よく考えて遊ぶ子」「心豊かで思いやりのある子」「健康でたくましい子」として、園児の指導に当たっている。

本年度の研究主題「共に育つ仲間づくり」

研究テーマ「気がかりな幼児の状態等に応じた計画的・組織的な指導の在り方について」「幼小連携による発達や学びの連続性をふまえた接続期の教育の充実について」

平成24年度に全国国公立幼稚園教育研究協議会・福井大会開催が予定されている。鯖江市公立幼稚園研究会は「特別支援教育」で提案することになっており、現在研究が進められている。本年7月12日、当園を会場に県・市指導主事・市教育委員会・市内7園の教員が参観する中、鯖江市幼稚園教育研究集会が行われた。研究会は、気がかりな園児に対する支援の手立てとして、幼・小連携教育活動に取り組む姿、また、支援を受けながらそれぞれの園児がのびのびと活動する姿を公開した。研究協議会では本園の研究の取組みのプレゼンテーションを行い、その後はKJ法により参加者からの感想・意見・疑問等を積極的に聴き取る中で活発な議論が交わされた。研究会を本園で開催したことは、教員にとって研究主題に積極的に向き合う良い機会となった。

研究を進めるに当たり、専門機関との連携を大切に



している。特に、特別支援教育センター指導主事2名を、ほぼ毎月のように招聘している。これは筆者自身が教職大学院で学んでいることもあり、大学院での学びから、校種の違いを超えた出会いと交流がもたらされ、それぞれの現場で生かされていると感じている。

本園の家庭・地域との連携による特色ある教育活動として、地域に開かれた幼稚園を目指し、積極的に地域人材活用を行っていることがあげられる。例えば、週1回の声楽家によるミュージックタイム・公民館教室講師による近松音頭教室、月1回の茶道教室を設けている。そして、それぞれの活動が地域に出ていくきっかけとなり、地域の春祭り・夏祭り・敬老会・文化祭にも賛助出演している。これらの活動を通して地域の幼稚園に対する理解を得る機会となると同時に、地域の教育力を生かす機会ともなっている。今後も、家庭・地域・小学校・専門機関と連携した幼児教育を目指していきたい。



学会報告 ～学びを拡げる多様な活動～

日本教師教育学会第21回福井大会を終えて

福井大学教職大学院 森 透

去る9月17-18日(土・日)の両日、福井大学にて日本教師教育学会第21回大会が無事終了しました。参加者数は約320名で地方大会としては非常に多い参加人数でした。大会テーマは「教師の専門職としての力量形成を支える学習コミュニティ (professional learning communities)と大学の役割 ―大学と学校との協働研究の展望を探る―」。記念講演はハッカライネン (Pentti Hakkarainen) 氏(フィンランド・オウル大学カヤニ校教授), シンポジウムはコーディネーターが岩田康之氏(東京学芸大学)と松木健一氏(福井大学), シンポジストが高間祐治氏(福井大学教職大学院拠点校: 福井市至民中学校研究主任), 大脇康弘氏(大阪教育大学大学院教授<夜間大学院>), 望月善次氏(盛岡大学学長)の3名でした。ハッカライネン氏の通訳は北田佳子氏(富山大学)にお願いしましたが、抜群の通訳でした。

ハッカライネン氏は自国フィンランドの教育について世界的に注目されているが、実際は様々な課題を抱えていることを強調されていたことが印象的でした。3人のシンポジストの報告はそれぞれ個性的で興味深かったのですが、高間氏は至民中の特徴をわかりやすく報告されていました。大脇氏は大阪教育大の現職院生とのコラボレーションの醍醐味と抱えている課題を率直に語られ、福井大教職大学院ではどうでしょうか、と投げかけられたこと、現職の先生方の課題や思いとそれに対して大学院は何をすべきなのか、カリキュラム構成の点も含めて考えさせられました。望月先生が最初に東日本大震災の写真と映像を流されたことも印象深いものでした。

自由研究発表は私自身ほとんど聞くことができ

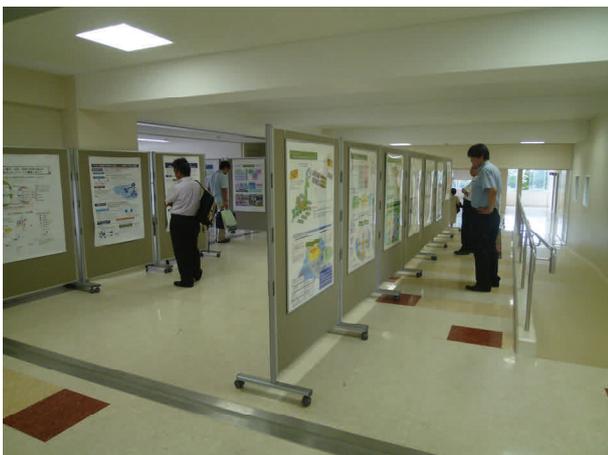


なかつたのですが、福井大学から4つの発表がありました(フィンランドの教員養成, ライフパートナー, 教職志望学生への支援, 教職大学院のインターンシップ)。私はインターンシップの発表だけを聞くことができましたが、松木・笹原両会員がインターンシップの全体構造と具体的事例を丁寧に報告され、参加者の注目を集めていました。

1日目の夜は情報交流会(懇親会)の参加者は100名を超え、会場の11講義室と12講義室が満杯の状態でした。耐震工事の関係で食堂が閉鎖で会員の皆様には大変ご不便をおかけしたのですが、たくさんの方々が料理とお酒を味わっていただいたことに深く感謝したいと思います。津軽三味線の佐藤さん(附属幼稚園育友会役員)の演奏と語りは素晴らしく、東北地方の被災地への思いを込めたものでした。

2日目の特別課題研究「東日本大震災から学ぶこと―現地からの発信をもとに、学会として考えるべきこと―」は3月11日の大震災後の現地からの報告と学会として何を学び何をすべきなのかについて考える場でした。私はこれだけは参加したいと思い参加しましたが、東北大学・福島大学・盛岡大学の3報告は生々しい現場からの内容で重くて貴重な報告でした。司会された神戸大学の会員は阪神・淡路大震災の経験を踏まえて議論をリードしてくれました。9月22日の「福井新聞」に記事が掲載されました。

2日目の夕方から開催されたラウンドテーブルでは、福井大学から「福井大学大学院における院生の専門性の獲得と実践的力量的形成―教職大学院



と既設大学院の取り組み」を企画しました。ラウンドテーブルという自由研究発表とは違った自由な発表の場で福井大学の取り組みを報告し、参加者と共に大学院教育について考えたいという趣旨でした。私はラウンドテーブルには全く参加できなかったのですが、ビデオ録画と参加した院生への聞き取りで全体像が分かりました。報告後の参加者からの質問は的を射た内容のあるもので、教職大学院における教科の専門性について、教職大学院と既設大学院2つの合計3つの報告があったが、お互いに聞き合いそれぞれの大学院ではどのような力がついたらと思われるのか等、富山大学・大阪教育大学・武蔵大学などの方々からの貴重な質問でした。それらに対する院生の回答は四苦八苦をしながらも、自分たちの取り組んできたことを深く省察する機会となったようです。院生同士がお互いに実践を聞く機会がなかなかとれない現状では院生にとっても貴重な場となったのではないかと思います。

今回の福井大会の特徴は3つあります。①前日の9月16日(金)に企画された教職大学院拠点校の福井市至民中学校参観、②ラウンドテーブルとポスターセッションの企画、③福井大学の学部&大学院教育の紹介特設コーナー、です。①の参加者は約40名で福井駅から至民中までの送迎に附属特別支援学校のスクールバスをお願いしました。附属の関係者に深く感謝致します。②の申込者はラウンドテーブルが5、ポスターセッションが7でした。ラウンドテーブルは学会の2日目の夕方からでしたが、どの会場も熱心に報告と討論がありました。ポスターは2階のロビーに7つのポスターが並べられ、その前で解説や質疑が行われていました。圧巻は福井大学の紹介コーナーでした。パネルは全部で40枚近く、学部教育の教育実践研究と探求ネットワーク・ライフパートナー、大学院では教職大学院の構造と拠点校紹介、そし

て既設大学院の紹介でした。参観者はじっくり見たり写真を撮ったりして福井大学の実践に注目していました。

以上、今回の2日間の学会は前日の至民中参観も含めて大成功であったと自画自賛しています。準備段階からご協力いただいた関係の先生方(特に事務局長の大和先生)及び院生には感謝です。特に当日は朝早くから駆けつけて一日奮闘してくれた院生の力がなければ成功しなかったと思います。最後に、今回の学会の後援をいただいた福井県教育委員会、福井市教育委員会、そして福井観光コンベンション協会に感謝致して学会報告と致します。



日本教師教育学会福井大会 福井新聞社提供 2011.9.22

教師教育ネットワーク・交流のひろば

このコーナーは、全国各地で教師教育に取り組んでいる教職大学院や既設大学院等の実践と研究を交流する広場です。今号では、東京学芸大学教職大学院の取り組みを紹介し、皆さんの投稿を期待しています。

東京学芸大学教職大学院の現状と課題を探る —「カリキュラム開発の方法」を中心に—

東京学芸大学大学院教育学研究科 教育実践創成講座(教職大学院)教授 成田 喜一郎

1 はじめに

本稿の目的は、創設から4年目の本学教職大学院の教育研究の現状と課題を探ることとしたい。ただし、紙幅の関係もあり、本格的な総括ではな

く必修科目「カリキュラム開発の方法」を中心とした一専任教員の「私見」の域を出るものではないことを予めお断りしておきたい。

2 現状

筆者が担当する「カリキュラム開発の方法」(4単位)の授業は、ストレートマスター1年(以下S)と現職教員学生(以下G)の計30名を対象とし、三石初雄とのT.Tで行っている。また、後期の後半からは、「授業研究の方法」(4単位、立木正・川崎誠司)と2コマ連続の協働授業として展開している。

この授業のねらいは、概括すると以下のとおりである。

- (1) 学習指導要領の歴史的変遷とその特徴・基準性、改訂の経緯や基本方針、各教科等の目標・内容について体系的・構造的にとらえ、学校の教育課程との関係性を理解(熟知)し、他者[S:新人教員・若手教員, G:全教職員, 保護者等]に説明できる。
- (2) 各教科等の単元(年間)の学習指導計画作成に必要な条件や要素を明らかにし、学習指導計画を改善するための具体的な視点・課題についての[S:理解, G:熟知]し、他者に説明できる。
- (3) カリキュラムマネジメントの在り方について[S:その基本を理解, G:時代の変化を予想・考察, 熟知]し、地域の課題に対応した学校の実現に向けた教育課程の編成・実施・評価の在り方について他者[S:新人教員・若手教員, G:全教職員, 保護者等]に説明できる。

前期は、主としてカリキュラムの歴史と理論に関する講義及びGの所属校訪問によるカリキュラム調査・報告を行い、後期は、S・G混合のグループによるカリキュラム開発と、後半は「授業研究の方法」の授業との協働により2コマ連動させた学習指導案の作成・模擬授業の実践と研究協議を行っている。【図】参照

この授業は、S・G両学生にとってもっともstressfulな授業である。Sにとってカリキュラムとは、学部のとときに受けた「教育課程論」の記憶しがなく、また、学部の教育実習では担当する範囲の単元・本時の授業の経験知しかない。Gにとっては、計画としてのカリキュラム＝教育課程という経験知は有するが、計画・実施・評価、そして潜在カリキュラムを含み貫く包括的な概念であることへの戸惑いがある。しかも、本学では、異なる経験知を有するS・G同士が共に学び合い、協働してカリキュラムを開発する授業としていることもstressfulな要因となっている。学生たちのstressfulな様相と向かい合う授業者・三石と筆者のstressも並大抵なものではない。

しかし、S・Gの修了生からのヒアリングによると、こうした心の平地に波風を立てるが如き授業「カリキュラム開発の方法」も、S・G両学生が大学院を修了し、学校現場に入ったり戻ったり、教育委員会での仕事に携わるようになったりして初めて、「カリキュラム開発の方法」で学んだ理論と実践の意義・意味を認識できるようになる。

3 課題

確かにカリキュラムの開発のデザインと「授業研究の方法」と協働した検証・模擬授業づくり、研究協議というリアリスティックな文脈に位置づけられた実践的な研究が行われているが、今後の「カリキュラム開発の方法」の課題として、以下の4点が挙げられる。

- (1) Backward Designにより「カリキュラム評価の理論と実際」というゴールを前期中に明示できるよう理論的実践的なアプローチとシラバスの改訂を行うこと、
- (2) 「カリキュラム開発の方法」と「授業研究の方法」との連携・協働を一層強化すべくこの両必修科目担当者(4名)間で予察・実践・省察のコミュニケーション・サイクルを重視し、シラバスの創成・生成・更新を行うこと、
- (3) 個々の学生が抱える「課題研究」、連携協力校における「創成研修(実習)」との関連を図り、より具体的でリアリスティックな「場」との架橋・往還をめざすこと、
- (4) さらに「なぜ、今、どのようなカリキュラムの開発が必要なのか」「なぜ、今、どのような授業研究が必要なのか」と言った本質的で根源的な問いをS・G両学生だけではなく、筆者ら授業者も常に抱え、ディスカッションし続ける文化を築くことである。

	カリキュラム開発の方法(後期の目標・手立て):2 限	授業研究の方法(後期の目標・手立て):3 限
目 標	<ul style="list-style-type: none"> ●到達目標及び評価規準、前期からこれまでの講義(三石・成田)等を踏まえて、以下のようなカリキュラムを開発し、模擬的検証を行う。 ●協働してある校種の学校教育計画と年間学習指導計画又は単元学習指導計画を作成する。 ●協働してある校種の教科外カリキュラム(総合、ESD、安全(危険回避)教育、環境教育、国際理解教育、情報教育、食育、キャリア教育等)の開発、ある校種の教科カリキュラムの開発を行う。 ●ある校種の学校の対象学級や対象学年の児童生徒の実態・学びの履歴、地域の実情を具体的に想定し、カリキュラムの開発を行う。 ●異校種の教師たちで構成された班での協働作業を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ●児童・生徒の望ましい姿を目指した授業の充実・改善を図るために、各教科・領域等の実践的な指導方法を身につけ、教師としての実践的力(授業力)の向上を図る。 ●自他の学校や地域における研修会や研究会において、高い専門性をもって指導・助言ができる力の向上を図る。 ●附属小・中学校の授業観察と研究協議を行う。 ●模擬授業づくりと模擬授業実践・研究協議会を行う。 ※カリキュラム開発の方法において開発したカリキュラムの中に位置する模擬授業をつくり、実践する)
一 次	カリキュラム開発の方法講義Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ カリキュラムの開発デザインⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ (計7時間)	「授業観察」と「研究協議」 「評価を機能させた授業改善」(外部招聘講師)等(計7時間)
二 次	カリキュラムの開発デザイン/その検証デザインⅠ・Ⅱ 開発カリキュラム及び検証概要の報告Ⅰ・Ⅱ (計4時間)	模擬授業づくり(学習指導案等の検討)①②③④ (計4時間)
三 次	検証模擬授業+カリキュラム+授業研究協議Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ (計3時間+3時間) (カリキュラム開発・授業研究に関する省察回順・予察展望)	
評 価	総括:後学期のまとめと授業評価 (1時間)	総括:後期のまとめと授業評価 (1時間)

図:「カリキュラム開発の方法」と「授業研究の方法」の連携・協働

福井大学教育地域科学部附属小学校
第37回教育研究集会

協働して学びを深める授業をつくる

〒910-0015 福井市二の宮4-45-1

TEL 0776-22-6891 FAX 0776-22-7580

<http://www.f-edu.u-fukui.ac.jp/~fuzoku-e/index.htm>

12/2 (金) 9:00-16:20

平成24年度福井大学大学院 教育学研究科教職開発専攻(教職大学院)
学生募集スケジュール

事前説明会	平成23年12月24日(土)
出願期間	平成24年 1月17日(火)~20日(金)
ガイダンス	平成24年 1月28日(土)
選抜期日	平成24年2月11日(土)
合格者発表	平成24年2月21日(火)

※募集要項は12月上旬に県内全ての学校に発送を予定しています。

問い合わせ先: 福井大学学務部入試課 [本学ホームページ <http://www.u-fukui.ac.jp/>]

<すべての教師のための教育総合マガジン> 総合教育技術12月号掲載記事
特集 福井式若手教師の育て方

特集の内容

- 福井大学教職大学院の教師養成 7つのポイント
- 拠点校の実践① 福井県坂井市立丸岡南中学校
- 拠点校の実践② 福井大学附属特別支援学校
- 拠点校の実践③ 東京都板橋区立赤塚第二中学校
- 教職大学院性の長期インターン生活
- 中堅学校リーダーとして活躍する現職教員院生に聞く

- ①教師の「専門的力量」の養成
- ②大学教員が学校に向く「学校拠点方式」
- ③理論と実践が融合する福井式サイクル
- ④若手と現職の2つのコースと学び合い
- ⑤拠点校と大学院の協働実践
- ⑥2年間にわたる長期実習の意義
- ⑦福井県一丸となった協力体制

Schedule

- 11/26 sat 合同カンファレンス(9:30-12:30) 12/3 sat 合同カンファレンス予備(9:30-12:30)
- 12/24 sat 教職開発専攻(教職大学院) 入試事前説明会(15:00-17:00)
- 12/26 mon-28 wed 冬季集中講座(9:30-17:00)
- 1/5 thu-7sat 冬季集中講座・長期実践研究報告作成(9:30-17:00)
- 1/28 sat 教職開発専攻(教職大学院) 入試ガイダンス(10:00-12:00)

[編集後記]

後期のカンファレンスをはじめ、公開研究集會もいくつも開かれる秋は、教職大学院の実践と研究にとっても、みのりの秋になります。10月のカンファレンスと、公開研究集會で語り合われたことを中心に誌面を構成しました。忙しい中原稿を寄せていただいたみなさんに感謝します。(Y)

教職大学院Newsletter No.36

2011.11.25発行

2011.11.25印刷

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京3-9-1
dpdfukui@yahoo.co.jp